

■中居屋重兵衛 なかいやじゅうべえ ・・・・・・・・1820＝	異色の商人。世界の動向に通じ、横浜開港とともに、上州絹の輸出に乗り出すも、突然姿を消した。 草津温泉の湯治客が往来する浅間山北麓の宿場上野国吾妻郡中居村で、旧家の名主黒岩幸右衛門の子に生まれる。
シボムト追放・1829＝9歳：	
	父は事業家であるとともに、墨峰と号する画人で、旅を好んで家を明けることが多く、早くから名主の代役を立派に務め、母が武蔵国川越の藩儒の娘であったこともあって、学問を志向して教養を身につける一方、鉄砲を肩に山野をかけめぐり、 また、父が経営する草津温泉の宿にも往来して、江戸の文人墨客の雰囲気にもなじみ、やがて、江戸に出ることを望むようになるが、家の事情で許されず、
大塩平八郎乱1837＝17歳： 適塾オープン・1838＝18歳： 蚕社の獄・1839＝19歳：	出奔し、江戸で母方祖母が後妻として嫁いでいた日本橋の書店和泉屋善兵衛を頼って、寄食人となり、 書棚の本を読み漁るとともに、出入りする学者らとも交流、蘭学にまで学殖を深め、
阿部正弘首座1845＝25歳：	
・・・・・・・・1847＝27歳：	
北斎没・・・・1849＝29歳： 国定忠治磔・1850＝30歳：	*独立して、日本橋で開業、中居屋撰之助と名乗り、 *商人を志す青少年のために、商人の前に人間たれ、私欲で無く国のために利益をという内容の「子供教草」を印刷して頒布する一方、外圧の高まるなか、誰も思い及ばなかった火薬の製造販売に着目、全国の砲術家を訪ね、実験もし、蘭語の力をいかして、西洋の技術もわがものにした上で、幕閣の有力者に近づき、諸藩に売り込んで莫大な利益を上げ、江戸屈指の豪商になるに至る。
ペリー来航・1853＝33歳： 安政大地震・1855＝35歳： 松下村塾・1856＝36歳：	自ら研究した火薬製造法を画入りで詳述した「砲薬新書」を出版して公開、 この年和泉屋善兵衛が出版した遠田昌庵訳「和蘭文典訳語笈」初編に序文を書くほどであった。
安政の大獄・1859＝39歳：	*幕府が諸外国に約束していた横浜が開港すると、幕府要人から指名され、江戸の店を閉じ、東奔西走し、豪壮でひときわ抜きん出た建物をつくって、出店。外人の注目を引くばかりでなく、売れそうなものは全て揃え、とくに生糸に重点を置き、外国商館に生糸を売った初の日本人となり、日記「昌平日録」を残すが、
桜田門外変・1860＝40歳： 遣欧使節・1861＝41歳：	*突然、横浜から姿を消し、以後、全く行方不明となった。幕府の定める生糸輸出量を超えて販売したことが露見し、幕吏が店に踏み込んで逮捕、投獄され、資産も没収され、まもなく没したらしい。